

蔵書散策 第10回

渡辺弼『まなびの日記』

小笠原流礼法の伝書を中心に、古記録、古文書、絵図、瓦版など貴重な資料の宝庫である用和堂文庫の中から、渡辺弼の『まなびの日記』を紹介したい。

用和堂文庫の旧蔵者渡辺家は尾張の出身で、土方領の領知代官として能登へ来たのが当地との関わりの始めであるらしい。その後、長兵衛の代に前田家に召し抱えられた。その次男藤兵衛は兄の家に住まいし、医者を目指したが若くして亡くなり、その息子次左衛門が新たに家を興し、加賀藩礼法師範渡辺家の祖となった。因みに、次左衛門が藩校の礼法師範を仰せつかったのが寛政5（1793）年2月、江戸の小笠原家に弟子入りしたのが同年9月である。次左衛門この時50才であった。用和堂文庫礼法書の多くはこの次左衛門の手によるものである。次左衛門には子がなく、55才の時養子をむかえている。喜内である。喜内にも子がなく、文政14（1829）年、定番御馬廻組笠間周太郎弟佐太夫を養子にむかえている。通称佐太夫、本名弼、その時16才であった。天保11（1840）年4月、養父喜内が病死し、弼は同年7月家督を相続した。

『まなびの日記』（4冊、別帳1冊）は、弼が江戸詰を命じられ、小笠原家に伺った天保14（1843）年の3月より文久2（1862）年閏8月まで、約20年間の小笠原家との交流の記録である。日記は次の言葉で始められている。

「天保十四といふとしの弥生七日、東の詰として金沢を門出し、同じき十九日に江戸の御屋かたへ着ぬ。夫よりして師の御許へ学びのため通ひ侍りし事の、年へて忘れもやすと、ひなの艸に託して後のむま子（子孫）のためにそなへ畢。」

さて、注目したいのは、日記中、「破魔弓之書今日拝借」（天保14年5月23日）、「破魔弓之書写取返上致す」（同年6月6日）といった記事である。このように多くの典籍の名が日記に記されている。以下、例として『糾

用和堂文庫礼法書の成立事情



『まなびの日記』第1冊巻頭

方礼誼抄（ただしかたれいぎしょう）』について記事を追ってみよう。なお「糾方」とは幕府の礼法師範を意味している。

「糾方礼誼抄一之巻拝借仰付られ候、大切の本に候得共御ゆるし申候、しかし是迄御亡父（喜内）二も御写し之なき八不審の事二候、第一心得申べき書二候得バ、必御写しと存候處、如何の訳にて御写し之なき哉、外門人とも違、御手前方八格別の訳二候間、先達より親共より御かし申候と存居候と平兵衛様御申成られ候。」（天保14年9月朔日）

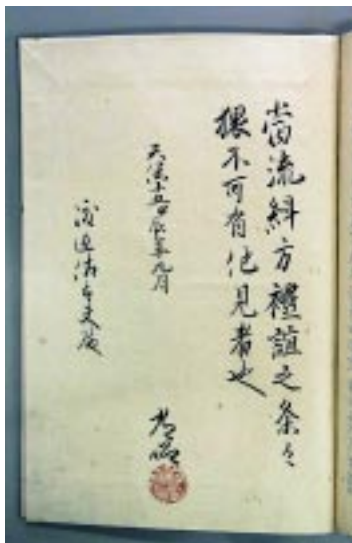
将軍吉宗の命により小笠原家の当主は代々平兵衛を名乗り、嫡子は孫七郎と称するようになる。この時の平兵衛は小笠原常昭である。先の記事は、常方、常亮、常昭と三代の師に、次左衛門、喜内、弼とこちらも三代の弟子である渡辺家は特別の弟子であり、礼法の基本的な書物である『糾方礼誼抄』を祖父か父の代に既に書写していなかったのは不審であるが、お貸しすると云うものである。

「礼誼抄一之巻並配膳之次第第一冊返上」（閏9月11日）、「礼誼抄二之巻又三郎（常昭弟）様より拝借」（10月6日）、「礼誼抄二之巻返上、次冊之義八来月二至り彼是繁勤二て書写も仕兼候間、明春に至り拝借の段申上

候」(11月28日)、「糾方礼誼抄三冊目拝借」(天保15年1月30日)[途中省略]

「礼誼抄十四五之巻返上次冊拝借致し候、是にて全相済候段仰せられ候」(7月29日)、「糾方礼誼抄十六巻書写相済返上仕候处、是二而全冊之終仰せられ候」(8月17日)、「先達而(せんだって)書写致し候糾方礼誼抄、表紙等出来二付今日持参、御奥書相願候(おんおくがきあいねがいそうろう)」(9月14日)

これらの記事から『糾方礼誼抄 全16巻』が、一冊づつ借り出され、約一年掛けて書写されたことが分る。文庫所蔵の同書の奥書(おくがき)には「当流糾方礼誼之条々、猥(みだりに)他見有べからざる者也/天保十五甲辰年九月/常昭^印/渡辺佐太夫殿」と平兵衛常昭の自筆で記されている。日記の記事と相応する。以上の例から、次左衛門、喜内、弼(佐太夫)三代に渡って書写された用和堂文庫礼法の書が同様に成立したと推察される。



『糾方礼誼抄』奥書

次に、嘉永3年の日記を見てみよう。嘉永元年10月何度目かの江戸詰のために出府して以来、1年半の滞在を経て、金沢への帰国を数日後にひかえた3月晦日、暇乞いのため小笠原家を訪れると、来客の予定があり忙しいので明朝まいるようにとのことで、仕方なく明朝(4月朔日)平服で伺うと、思いがけず次のように仰せられた。「今朝御越の様申入候義、別義二而も之なし、御自分二而三代の門弟、其上格別御執心二付皆伝授御免し申候。」

免許皆伝の証文を頂いたのである。弼は、服装を改めず参上した失礼を詫びながら恐悦したのである。平兵衛はわざと弼をびっくりさせようとしたらしい。文庫中には立派な皆伝証文が残されている。

この日記の別の注目点は、小笠原家訪問の都度持参した進物品を克明に記録している点である。井波の糸巻落雁、石動の薄氷などの銘菓や氷見の干鰯、それから能登産とみられる鱈の子、鰯などの味噌漬けや粕漬け、鮫鱈筋など。また将軍家献上の氷室の氷なども贈っている。中でも面白のは、金沢の郷土料理鴨のじぶ煮を材料別に4個の重箱に詰め、汁は別に徳利に入れ、酒2升とともに持参した記事。賑やかな酒盛りが行われた(弘化4年12月24日)。

なお、日記には『小笠原殿へ呈書並進物之留』と題する別帳がある。江戸での書簡だけではなく、日記には記載がない金沢在住の間に、小笠原家との間で交わされた書簡も記載されている。例えば、安政2(1855)年の平兵衛常昭の病氣、隠居、死亡に関する数通の悲しい手紙が記載されている。また、進物の留には日記に書かれた進物が整理されて、時には産地などの注釈を付け、あるいは絵入りで記載されている。

最後に渡辺弼について日記と文庫中の文書により付記すると、弼が結婚したのは天保元(1830)年、相手は木村勘六の次女であった。父や、祖父と違って子に恵まれ、文庫中には三番目の娘の縁組許可願が残っている。また、皆伝証文を頂いて一旦帰国した同じ年嘉永3年、9月からの江戸詰では、息子三五郎を同道、三五郎も小笠原家に入門、親子同道の稽古の記録が始まる。弼も楽しげである。さて、明治15年9月付けの小笠原家の皆伝証文が渡辺蕃に許されている。そこには「曾祖父以来四代之門弟、於其許者(そこもとにおいて)は)当家三代之門人」とあり、小笠原系図によれば「当家三代」とは、常昭、常高、常正の三代であり、平兵衛常昭に学んでいる日記中の三五郎は後の渡辺家四代目蕃である。文庫中に『明治廿三年渡辺蕃徳川公邸二於テ流鏑馬挙行ノ図』があり、蕃の騎上の勇姿を彩色図で見ることができる。

(情報サービス課図書館専門員 梶井重明)